

ご先祖様から私たちへの贈りもの

自然災害伝承碑の事例
(京都府)

初版 (2022 年 11 月 12 日)

令和 4 年 11 月

辻 謙一 現地撮影

- 文章は一部 国土地理院地図等から引用
- 本資料は研究用して整理したものである
- 標題における「○」は国土地理院地形図に掲載済箇所、「●」は未掲載箇所

- 京都市 東山区 知恩院南 室戸台風 強風
- 京都市 右京区 高山寺 室戸台風 強風
- 京都市 東山区 大谷本廟 室戸台風 強風
- 京都市 東山区 京都女子大学構内 室戸台風 強風
- 京都市 上京区 妙蓮寺 室戸台風 強風

- 京都市 上京区 西陣小学校(廃校) 室戸台風 強風

- 京都市 上京区 上立売通 水害
- 京都市 北区 御園橋下流左岸の集落地 水害
- 京都市 伏見区 羽東師神社境内 水害
- 八幡市 善法律寺 室戸台風 強風
- 八幡市 八幡在応寺(三川合流 背割り) 伊勢湾台風最高水位記録標識
- 久御山町 大池神社 水害
- 久御山町 大松寺 木津川決壊 水害
- 宇治市 巨椋土地改良区敷地内 水害
- 城陽市 城陽排水機場内 水害
- 宇治田原町 郷ノ口 南山城水害
- 井手町 玉水駅構内 南山城水害
- 井手町 石垣区公民館 南山城水害
- 井手町 高神社 南山城水害
- 南山城村 南山城水害
- 木津川市山城町 南綺田 南山城水害
- 木津川市山城町 北平尾 南山城水害
- 木津川市山城町 北河原 南山城水害
- 木津川市木津 正覚寺境内 洪水供養阿弥陀石仏 水害
- 木津川市木津殿城所在地 関東丹後但馬大震大災死者大菩提 地震
- 木津川市山城町 泉橋寺 水害
- 和束町 大井手用水災害復旧 南山城水害
- 亀岡市 平和池ダム跡地 平和池水害
- 亀岡市 篠町柏原 年谷川堤防 平和池水害
- 亀岡市 矢田天満宮 平和池水害
- 亀岡市 亀岡駅南 水害標識塔
- 亀岡市 鶯ノ川左岸堤防 改良記念碑 水害
- 亀岡市 東別院村 水害

- 南丹市八木町 大堰橋上流右岸堤防 水害
- 南丹市美山町 大野ダム 水害
- 京都市南区 天神川（現西高瀬川）改修碑
- 京都市右京区 御室川治水碑
- 綾部市 水の記憶の碑小公園 水害
- 福知山市 福知山河川国道事務所隣接地 水害
- 福知山市 由良川左岸堤防 水害
- 福知山市 治水記念館 水害
- 福知山市 法川排水機場 水害
- 福知山市 堤防神社 水害
- 綾部市 綾部用水堰 水害
- 京都市上京区 清浄華院 強風による大火
- 京都市上京区 円通寺 強風による大火
- 舞鶴市和江 瀬戸島開紀功碑 水害

- 福知山市 一級河川土師川河川災害復旧助成事業完成記念碑 水害

- 福知山市雲原 雲原砂防 水害
- 京都市山科区 勸修小学校 室戸台風 強風
- 京都市伏見区 桃山高校 室戸台風 強風
- 木津川市木津 木津惣墓五輪塔 水害
- 京丹後市峰山 峰山小学校 地震
- 京丹後市峰山 丹後震災記念館 地震
- 与謝野町 板列（いたなみ）神社 地震
- 与謝野町 男山板列（いたなみ）八幡神社 地震
- 与謝野町 男山板列（いたなみ）八幡神社 地震
- 京都市 西京区 大悲閣千光寺 大堰川開削工事での犠牲

○15 か所

●43 か所

○京都市 東山区 知恩院南 室戸台風 強風





(碑文 要約)

昭和9年(1934)9月21日、西日本一帯に猛威を振るった室戸台風の暴風により、京都市及びその周辺において数校の木造校舎が倒れ、その下敷きとなって児童162名、教員4名の命が奪われた。この像は戦後に再建されたものである。

(碑文 背景)

昭和9年(1934)9月21日、関西地方を猛烈な台風が襲った。

最低気圧は911ヘクトパスカル、瞬間最大風速60メートル、死者・行方不明者は3037名にのぼった。特に風が強い台風で、気象台の風速計が振り切れたという話もある。

大きな爪痕を残したが、最も胸を痛めるのは数多くの小学校に被害が及んだこと。

台風の翌年、京都市がまとめた『京都市風害誌』によると、13の小学校で校舎が倒壊し、35の小学校で大破などにより校舎が使用不能になった。

また、京都市内だけでも、112名の児童、3名の訓導が尊い命を落とした。室戸台風は、朝の8時頃に関西に上陸したため、登校してきた児童たちが犠牲になった。最も大きな被害が出たのは、西陣尋常小学校。

1時間目の授業が始まった頃だったので、521名の児童が倒壊していた校舎の下敷きになり、41名の児童が亡くなった。

それについて市内で大きな被害にあったのは、淳和(じゅんな)尋常小学校。この小学校は、現在の西院小学校。もともとは京都西郊の葛野(かどの)郡西

院（さいいん）村にあり、西院校として開校。昭和6年（1931）、京都市に編入され、まもなく淳和尋常小学校と改称された。これは、いにしえ、この地に淳和上皇の居所（後院）があったためです（これが「西院」という地名の由来となっている）。

台風当日の淳和小学校では、朝、校長から「風雨に注意するように」という訓示があったが、近くの春日神社の杉木立が折れたり倒れたりし始めた。すぐに講堂に避難するよう指示が出たが、校舎が倒壊し、32名の児童と1名の訓導が亡くなった。

これ以外にも、下鳥羽、向島、大内第三の各校で児童が亡くなり、向島では訓導2名が落命した。

京都市内で亡くなった訓導は3名で、淳和小学校の松浦壽恵子訓導と、向島小学校の平井ノブ訓導、仲埜テル訓導。

松浦訓導を悼む像が、知恩院の南に立っている。

歌人・吉井勇の歌「かく大き愛のすがたをいまだ見ず この群像に涙しながる」が前面のプレートに記されている。

像は、戦時中に供出され、戦後の昭和35年（1950）再建された。

当時松浦訓導は30歳で、1年生の担任。当日の様子は、京都府が刊行した『甲戌暴風水害誌』には、次のように書かれている。

「俄に校舎がメリメリと鳴る。何か目に見えぬ強い威力が急に身邊を圧する。そこへ田中訓導が山田校長の命令を伝へ、「危険だからすぐ講堂に避難せよ。」と呼んで廻つた。松浦訓導は早速児童を廊下に出させ、講堂の方へ向つて前進を急がせ、自分も共に随いて行つたが、ふと、逃げ遅れた児童が教室に残つてゐないであらうかと思つたので、再び教室の方へ引き返さうとした其の刹那である。壁土はバタバタと白煙を吐いてあたりは濛々となり、天地も崩れんばかりの轟然たる音響と共に校舎は倒壊した。松浦訓導は倒れ来る校舎の柱を右手で支へるやうにして、「あぶないから早く、早く。」と連呼して一生懸命に児童を指揮督励しつゝ遂に逃げ遅れた数十の児童と共にその下敷となつてしまつた。」

柱の下から救出された松浦訓導は、頭に傷を負って亡くなった。

しかし、その胸にはひとりの児童を抱きしめていて、その女の子は少しの怪我もなく助かった。

女の子の父親は、運ばれていく松浦訓導の姿を見て「お前は先生のお蔭で助かったのだ。なぜ先生と一緒に死ななんだ」と涙ぐみ、合掌した。

当時、市内の小学校の校舎は、徐々に鉄筋コンクリート化が進んでいた。しかし、市内全域の木造校舎率は高く、約8割が未だ木造校舎であった。とりわけ、昭和6年（1931）に京都市に編入された新市域には、木造校舎が多かったと言ひ、倒壊校舎の多くは周辺部の小学校であった。一方、鉄筋校舎は無事で、校舎

によって明暗が分かれるという痛ましい事態になった。

室戸台風後、昭和14年（1939）にかけて、京都市内の小学校では校舎の鉄筋化が進められていった。

●京都市 右京区 高山寺 室戸台風 強風





(碑文 要約)

風災慰霊塔

風災惨死霊慰

(碑文 背景)

淳和（じゅんな）尋常小学校は、現在の西院小学校にあたる。もともとは京

都西郊の葛野郡西院（さいいん）村にあり、西院校として開校。昭和6年、京都市に編入され、まもなく淳和尋常小学校と改称された。これは、いにしえ、この地に淳和上皇の居所（後院）があったため、これが「西院」という地名の由来となっている。

台風当日の淳和小学校では、朝、校長から「風雨に注意するように」という訓示があったが、近くの春日神社の杉木立が折れたり倒れたりし始め。すぐに講堂に避難するよう指示が出たが、校舎が倒壊し、32名の児童と1名の訓導が亡くなった。

京都市内で亡くなった訓導は3名で、淳和小学校の松浦壽恵子訓導と、向島小学校の平井ノブ訓導、仲埜テル訓導であった。松浦訓導を悼む像が、知恩院の南に立っている。

●京都市 東山区 大谷本廟 室戸台風 強風





(碑文 背景)

昭和9年(1934年)9月21日早朝に四国に上陸した室戸台風は、京阪神に大きな打撃を与えた。大阪府豊能郡豊津尋常高等小学校も、木造2階建ての校舎が倒壊し、51人の生徒と2人の女性教師が死亡する惨事となった。死亡した女性教師のひとり横山仁和子先生は、3人の学童を身体の下にかばい自らの命と引き替えに守った。翌年9月21日に室戸台風の犠牲者を悼んで大谷本廟で一周忌の追悼法要が営まれ、あわせて「関西風水害罹災学童碑」の除幕式が行われた。この碑は、日曜学校関係者を中心に基金を募って建立された。

●京都市 東山区 京都女子大学構内 室戸台風 強風



(碑文 背景)

室戸台風は、大阪の豊津尋常小学校にも大きな被害をもたらした。ここでは校舎が倒壊し、京都女子大学の前身である京都女子高等専門学校の卒業生・横山仁和子先生が二人の児童を腕の中に抱きしめたまま犠牲になった。その両腕の中には元気な子供たちの姿がある。9月に着任したばかりの25歳の娘さんでした。京都女子大学のキャンパス内に、建学の精神を体現した人間像ということで、「師弟愛の像」とよばれる横山先生のモニュメントが建っている。

同じく豊津尋常小学校では吉岡藤子先生も犠牲になった。瓦礫の下から教え子六人をかばった先生の姿が見つかった。子供たちは奇跡的に全員無事であった。吉岡先生は山口県宇部市の出身で 29 歳、七歳の一人娘を残しての殉職であった。『ああ吉岡訓導』というタイトルで浪曲にもなり、菊池まどかさんがそのひととなりを伝えてくれている。

●京都市 上京区 妙蓮寺 室戸台風 強風





倒壊した西陣尋常小学校（「上方」46号所収）

（碑文 背景）

京都市内で大きな被害を出した小学校が、西陣尋常小学校。西陣尋常小学校では、1時間目の授業が始まった午前8時半頃、暴風によって2階建の木造校舎が倒壊し、1階にいた児童521名と職員10名が下敷きになった。3時間かけて全員を救出したが、41名の児童が亡くなった。

京都市内では、小学校で多大の被害が出、112名の児童と3名の訓導（先生）が亡くなり、私立両洋中学校でも20名の犠牲者を出した。

西陣小学校から3筋ほど上がった寺之内通大宮東入ルに妙蓮寺があり、本門法華宗の古刹で、中世以降、京都に大きな勢力を張った法華宗発展の礎となった寺院である。この妙蓮寺の山内東北隅に墓地がある。

この墓域の正面に、室戸台風で亡くなった児童たちを供養した慰霊塔が建っている。

表面の題額は「慰霊塔」。妙蓮寺の住職である大僧正・福原日事の揮毫。

その下には「西陣校罹災児童」とあって、亡くなった41名の氏名が刻まれている。

妙蓮寺にこの慰霊塔が建てられているのか。その理由は、塔の裏面に記されている。裏面の碑文は「昭和九年九月廿一日 突如天譴暴風水襲近畿関西之地」から始まる。

「殊西陣校惨禍最留憐」として、暴風が西陣小学校の校舎を瞬時に倒壊させ、41名の児童の命を奪ったことを記している。

台風の翌日、遺族の有志により、妙蓮寺の住持を招いて学区葬が営まれ、寺内に分骨を納めたと伝えられている。

その後、同寺塔頭・本光院の僧・宮宇地日演の発起によって慰霊塔の建設が提唱され、他の6院も賛同し、建立が進められた。宮宇地日演は後に妙蓮寺の住

職も務めている。



中央に「埋没四十一児童」とある



7院の名を刻む

碑文は長いが、台風の日日に妙蓮寺で学区として供養が行われ、それが契機となって慰霊塔の建立につながったことがわかる。

台風後、西陣小学校では建設中だった鉄筋コンクリート造の校舎が竣工した。この災害は、京都で鉄筋校舎の建設を促した。

●京都市 上京区 西陣小学校(廃校) 室戸台風 強風



↑ 公園との境に「西陣校」と記載の瓦が置かれている





(碑文 原文)

昭和九年九月二十一日 記念碑

(碑文 背景 京都新聞から引用)

「先生助けて」台風で校舎倒壊、今も耳に残る叫び声 98歳女性が室戸台風を証言

2021年9月21日 15:30

「お母さん、助けて。先生、助けて。そんな声が80年以上たった今でも耳に残っています」。1934年9月、当時「観測史上最強・最大」といわれた室戸台風が京都市を襲った。木造校舎の多かった市内では、小学校の校舎が倒壊し、幼い子どもたちの命が失われた。自身も校舎の下敷きになり生還した98歳の女性は、当時の惨状を今も鮮明に記憶する。女性の証言を元に、室戸台風の被害を振り返る。

女性は、京都市上京区の佐々木治子さん（98）。34年9月当時は西陣小の5年だった。9月21日、少しきつい風の中、佐々木さんは傘をすぼめながら登校した。

「あのころは『学校を休ませてはいけない』という風潮がありました。欠席するなんていう考えはありませんでした」

台風は21日午前5時に高知県の室戸岬を通過、大阪湾へと進んだ。気象庁ホームページ（HP）によると、室戸岬では最低気圧911・6ヘクトパスカルを観測。猛烈な力を保ったまま、台風は午前8時半ごろ京都市へと到達した。京都市が室戸台風の被害をまとめた「京都市風害誌」によると、最大瞬間風速は42メートルに及んだ。

登校した佐々木さんは、2階にあった5年の女子教室から窓の外に目をやった。「瓦が飛んでいく様子が見えたんです。先生からの指示で、窓側に机や椅子を集め、子どもたちは窓と反対側に固まるように言われました」その直後だった。「南側にあった教室の窓ガラスが一斉に割れました。慌てて廊下へ出ました」。佐々木さんは外へ駆けだそうとした。しかし、次の瞬間、木造2階建ての校舎は強い風にあおられ倒壊してしまった。しばらく意識を失っていたようだった。気がつくと、体は校舎の下敷きに。頭上のがれきの隙間から空が見えた。耳には佐々木さん同様に下敷きになった子どもたちの悲痛な叫び声が届いた。「『お母さん、助けて』『痛い』『先生』と泣き叫ぶんです」

少したつと上からミシミシという音とともに、「助けるからしっかりせえよ」「もうちょっとや。がんばれ」という声が聞こえてきた。近所の人たちが救出に駆けつけていた。佐々木さんは男性に助け出された。幸いにも大きなけがはなかった。「家に帰れるか」と聞かれ、「うん」と答えると自力で約250メートル離れた家を目指し歩き出した。はだしでの帰宅途中、学校近くの商家が救護所になっているのを見掛けた。軒先にはけがをした子どもたちが多く寝かされていた。佐々木さんには4年の弟文蔵さん（故人）と3年の妹貞子さん（96）がいた。文蔵さんは、校舎倒壊時に下敷きにならず、外に投げ出され自力で帰宅した。しかし、教室が1階にあった3年の貞子さんは長時間生き埋めになった。「妹は（倒壊から6時間以上経過した）午後3時ごろになって足を包帯でぐるぐる巻きにして帰ってきました」。きょうだい3人とも、けがを負いながらも命は助かった。「柱1本で生死が分かれるんです」。妹の同級生で近所の幼なじみ、嘉子（よしこ）ちゃんは、救出されるまで時間がかかった。「嘉子ちゃんのお母さんは地べたに手を付いて『うちの子を助けて』と叫んでいたそうです」。嘉子ちゃんはようやく救出されものの、病院へと搬送される自動車の中で亡くなったという。「妹によると下敷きになった後、しばらくは嘉子ちゃんの意識はありました。でも助からなかった。後に嘉子ちゃんの

お母さんは『なんで巽さん（佐々木さんの旧姓）のところは3人とも助かったのに、一人っ子のうちは…』と話していたそうです。かわいいお嬢さんだったのに」

西陣小の歴史を記した「閉校記念誌 西陣」によると、児童・職員約500人が下敷きとなり、41人の児童が亡くなった。41の小さなひつぎは、郊外にある蓮華谷（れんげだに）火葬場（京都市北区）で荼毘（だび）に付された。佐々木さんの父・文次郎さんは、地域の役員を務めていたため、火葬に立ち会ったという。佐々木さんが文次郎さんから「夜中なのに、『遺体を焼いてくれ』という親御さんが来られました。聞くと、ほかの小学校で亡くなったお子さんの家族だったそうです。順番待ちの列に入れてあげた、と父は振り返っておりました」

校舎倒壊は西陣小だけではなかった。京都市内の小学校だけで淳和（現西院、右京区）、下鳥羽（伏見区）、向島（同）など13校を数え、児童計112人が犠牲となった。室戸台風は関西全域でも大きな爪痕を残し、大阪市では高潮により広範囲が浸水した。滋賀県では瀬田川の鉄橋上を走行していた急行列車が強風にあおられて横転した。気象庁HPによると、全国で死者・行方不明者は3000人余りに達した。

1年後の1935年9月20日、知恩院（東山区）に犠牲児童・職員を悼む「風災学童慰霊塔」が建立された。建立に合わせて行われた式典に、佐々木さんは西陣小の代表の一人として出席した。その式典で披露するため、学校で覚えた歌を佐々木さんは今でもそらんじる。「いくら泣いても泣き足らぬ 悲しい夢の日が続く わたくしたちは小さくて まだ世の中に生きてゆく」西陣小の敷地内に「風害記念碑」、近くの妙蓮寺の境内には「西陣校罹（り）災（さい）児童慰霊塔」が建てられている。室戸台風から87年を迎える。佐々木さんは「今でも台風が来るといって、進路予想図に物差しを当てて京都に来るかどうか見ている。台風はいつまでたっても怖い」と語る。

西陣小は、児童数が減少したため1995年に閉校した。41人の児童が亡くなった歴史的事実を知る人も少なくなっている。「亡くなった子が、今でもかわいそうでかわいそうで」。佐々木さんは、悲劇の記憶と追悼の継承を願っている。

○京都市 上京区 上立売通 水害



(碑文 要約)

昭和10年(1935)6月29日未明、数日来降り続いた豪雨のため、京都市内を貫流する河川はすべて氾濫し、4万戸以上の市内家屋が浸水の被害を受けた。上京区小川学区では、29日午前5時に上立売小川の石橋が落ち、小川に面する家屋は倒壊流失または半壊した。碑には「大出水地上四尺」とあり、約1.2mの浸水があったことがわかる。

●京都市 北区 御園橋下流左岸の集落地 水害





(碑文 本文)

昭和十一年六月廿九日建立 水害紀年
河原町同組合

●京都市 伏見区 羽束師神社境内 水害





(碑文 原文)

久我の地から古川・樋爪・永垂・大下津・山崎を経て桂川に注ぐ本支流合わせて総延長十二軒余の人工水路モ問堀を羽東師川と呼んでいます。この川は桂川右岸低湿地の内水や悪水吐けの為に、文化六年(一八〇九)から十七ヶ年の歳月をかけて新川の掘さく古水路の改修樋門の設置などの工事が完成しました。かく

して二郡十二村の水場の人々は累代にわたる水害からまぬがれ、荒廃した土地は耕地にかわりその余慶は今日に及んでいます。しかるに此の工事は官府の力ではなく神明のご加護を祈り心身をくだき私財を投じて地域開発の素心を貫いた。

羽東師神社祠官で累代の社家古川吉左衛門為猛翁の独力によって成し得た大事業でありました。

文政八年(一八二五)工事が完遂するや羽東師神社の名を取り羽東師川と命名され西陣伊佐町井上傳兵衛氏は為猛翁の偉業を後世に伝えんと久我暇四ッ辻にこの道標を建立されました。爾来時は移り姿は変わりましたが、その功績を偲ぶに相応しき神社境内に鴨川町西村奈良松氏のご厚意をうけ昭和五十五年に現地に移設しました。今年は恰も工事着工より二百年の佳辰に当りこの偉業を称える為記念碑を建立し由緒を銘記した次第であります。

羽東師神社

○八幡市 善法律寺 室戸台風 強風



(碑文 要約)

昭和9年(1934)9月21日、かつてない規模の台風(室戸台風)の強風により、八幡尋常高等小学校の校舎のうち12教室2棟が倒壊、5教室が半壊した結果、教員及び児童34名の命が奪われた。

○八幡市 八幡在応寺（三川合流 背割り）伊勢湾台風最高水位記録標識



（碑文 原文）

台風災害としては明治以降最多の死者・行方不明者 5,098 名におよぶ被害が生じた昭和 34 年（1959）9 月 26 日の伊勢湾台風では京都府内でも死者 9 名、家屋の全壊 114 戸の被害があった。当碑は伊勢湾台風の襲来時に木津川で記録した最高水位地点を示している。

●久御山町 大池神社 水害



(碑文 原文)

万葉の昔より詩歌、文芸にあらわれた巨椋池は、古くから洛南の名勝地として知られ、古代よりわが国の歴史とともに歩んできた池沼であった。

淀・木津・桂の三川が合流して一大遊水地帯をなし、舟運の要衝であったが、沿岸住民は度重なる水害に悩まされていた。近時沿岸町村間に開墾干拓の要望が勃興し昭和十六年干拓工事の完成を見、現在の美田約七百ヘクタールが出現し米三万石が産出されるようになった。

昭和二十八年九月二十五日、十三号台風により淀川堤防が決壊、濁水が干拓田に流入、接続地とともに水没し昔時の巨椋池の再現を思わせた。その時の水位がこの碑の頂点である。

巨椋池土地改良区理事長 池本樽三郎

●久御山町 大松寺 木津川決壊 水害



(碑文 原文)

木津川決壊水量標

(御住職の奥様に聞き取りましたところ、「この石碑は他所から移転されたもので、石碑の基礎を付け足した可能性があり、必ずしも当時の水位高を表しているものではない」とのこと)

●宇治市 巨椋土地改良区敷地内 水害



(碑文 原文)

此地もと巨椋池と称し、宇治・木津・桂三川と連（つら）れる一大湖沼にして、水禍連年絶えず、明治43年淀川改修で一沼沢となるも災害尚終熄せず。水運魚獲の利益は、多く失はれることになり、土地の者夙（はやく）に之を憂

へ、干拓の急務を論じ、初め府営を冀（こいねが）ひしも果さず、現地の自営に頼るに及び、昭和に入り、国営開墾の議起るや、万難を排し之が実現に努めし結果、昭和4年帝国議会で豫算の通過を見、同7年2月本池施工を決定せられ11月耕地整理組合を結成し、翌8年6月起工の運に会へり。

爾来8年有餘の歳月を閲（えつ：へる）し、同16年11月竣工を告げ、遂に多年の宿望を達するを得たり。

干拓事業の経営は政府と京都府と組合との三者協力に依り、経費は国庫及び組合の支出に係り、合計342万4千餘円を算し、干拓田650町歩及び周囲既耕地改良1千餘町歩を得たり。

抑（そもそ）も巨椋池は、古く万葉集に其名著はれ、文人墨客の来遊相繼ぎ、沿岸亦史蹟に富む。

近年天然記念物に指定せられし「むじなも」の如き水藻を首（はじ）め、各種鳥類魚族の一大繁殖地にして、周辺住民は祖先以来其恵沢に浴すること尠（すくな）からざりき。

吾等此地に生育し親愛の情淺からざりしに、今や地勢と景觀との一新せるを望めば、懐旧の情甚だ切なり。而も滄桑（そうそう：時の移り変わり）の變に深く、聖代の餘徳を感ぜざるを得ず。

況（いわん）や皇国未曾有の時局に直面し食糧増産のため干拓地域の利用多大なるを惟（おも）へば、吾等の光榮と欣悦とは文詞能く尽すを得ざる所にして、住民積年の艱難と奮闘と亦（また）初て報いられたるに庶幾きをや、即ち上下内外に亘り関係各方面が一致協力の賜物なるを願みて、向後一層の人和を計り粉骨碎身厚生に資し、以て時局克服に貢献せんことを期せざる可らず。仍（よつ）て蕪文を撰して大要を叙し之を後昆に伝へんと欲す。細事は別に巨椋池干拓誌に詳にす。

昭和十七年十一月』

●城陽市 城陽排水機場内 水害



(碑文 原文)

渠成治水弥栄郷土

(碑文 背景)

昭和61年7月20日～22日にかけての豪雨（総雨量321mm・時間最大75mm）に見舞われ、城陽市内では、浸水家屋が1400戸を超える被害が発生した。この災害により、改修事業の抜本的な対応を求める機運が高まり、「河川激甚災害対策特別緊急事業」が導入され、古川の水を中間カットして、木津川へ直接放流する「城陽排水機場」が完成した。これにより、父祖の時代からの悩みであった洪水の被害が解消されたことを祈念して、平成2年9月に記念碑が建立された。

●宇治田原町 郷ノ口 南山城水害





(碑文 宇治田原町 町民の窓 令和2年9月記事)

【南山城水害・当時の惨状】

昭和28年(1953年)8月14日、夕方から降り始めた雨は夜にはますます激しくなり、午後9時頃には雷鳴も轟き、夜半の12時頃には風雨は更にその激しさを増し、雨音をかき消すような落雷の轟音は、人々を不安と恐怖に陥れました。

中心部を流れる犬打川・田原川も雨量とともに水かさを増し、道路は濁流の通り道となり交通はまったく不可能。

翌8月15日午前3時30分、犬打川上流のため池が決壊。続いて東谷新池、平の谷池等が次々に決壊。巻き起こされたすさまじい山津波は、川沿いの民家を容赦なく飲み込んでいきました。また、宇治田原村でも、禪定寺川、糠塚川等が決壊。奥山田地区では山崩れで一家8人が生き埋めになるなど、各所で大きな傷跡を残しました。

●井手町 玉水駅構内 南山城水害



(碑文 原文)

水難記念 昭和二十八年八月十五日南山城水害。それはこの町にとって忘れ難い悲運な記録である。前夜来の雨は時間雨量百五十ミリを超える稀有の集中豪雨となった。そして暗夜の中に猛り狂った水魔は町も人も一瞬のうちに躁躍。一夜明けた町は百七人の犠牲者を含む無惨な受難地獄であった。当駅も駅舎ホームは文字通り河原と化した。この石(6トン)は東南約五百メートル先の玉川から押し流されてきたものである。

昭和五十六年一月十五日建立玉水駅

(参考)

「集中豪雨」という言葉は、このとき朝日新聞の1日付夕刊で「集中豪雨、木津川上流に」という見出しで使われたのが最初。



家屋被災状況（綴喜郡井手町玉水地区）

京都府砂防協会発行の「京都府の昭和28年災害」から引用

●井手町 石垣区公民館 南山城水害



(碑文 背景)

昭和28年8月14日、夕刻頃から小雨であったが、22時か23時より強雨となり、8月15日に日付が変わった頃、雷鳴を伴う豪雨となった。午前2時半頃から才田川で最初の決壊、井手町においては低地での浸水が始まった。午前3時頃より玉川下流の右岸で、下流から順に越流・決壊が発生し始めた。そこへ、午前4時頃、上流にある農業用ため池（大正池・二の谷池）がほぼ同時に決壊し、山津波が発生。これにより玉川の上流でさらなる決壊が発生し、井手町は甚大な被害に見舞われることになった。

井手町玉水地区は木津川堤防、玉川堤防、谷川の堤防という3方を堤防で囲まれており、典型的な内水地区となっていた。そのため、ほかの被災地区では早

期に排水が進んだのに対し、この地区は災害後数日たっても水位が下がらず、しかも行方不明者の多くがこの地に流れ着くという状況が発生していた。

●井手町 高神社 南山城水害





(碑文 原文)

記念碑

維時昭和 28 年 8 月 15 日 弘暁未曾有の豪雨 南山城 一帯に降り 當村内各河川は 氾濫し 道路堤防の決壊 橋梁の流失 家屋の浸水 倒壊 田畑の埋没 山林の崩壊 等算なく 其の被災の甚大な事に 村民は一時茫然自失されとも 天の猛威に屈せず 有らゆる 困難を克服して 拳村一致 此等災害の復興を完遂す 特に當神社に於いては 神橋 流出に依り之を架設し 燈籠の移轉を行い 參道の改修に 山崩の砂防を施行す 茲に 碑を建て以て記念す

昭和 31 年 11 月 建立

高神社 宮司 宮崎愛太郎

○南山城村 南山城水害



(碑文 要約)

昭和 28 年 8 月 14 日の日没から 15 日未明にかけて集中豪雨が京都府南部南山城地方を襲った。豪雨は山津波を発生させ、土石流は家屋や田畑に襲いかかり、一瞬にして大災害をもたらすところとなった。この大水害によって、南山城一帯は犠牲者 336 名、流失・全壊家屋 752 戸を数えるとともに、田畑は砂礫の河原と化し、道

路は寸断されるなど、未曾有の被害を受けたのである。

その後、全村が一丸となって復旧に邁進し、三年にしてその半ばを達した。そこで南山城村では、災害の記念日である昭和 31 年 8 月 15 日に災禍の惨状を記して後世に残すため、この石碑を建立したものである。

(碑文 原文)

表面

復興 災害記念塔

裏面

南山城水害記念碑

昭和二十八年八月十四日日没より降り始めし雨は夜と共に益々勢を増し雷鳴天地を揺かし雨量刻々に増大 し夜半に至りては稀有の大豪雨となり十五日未明山津波と激流は家屋を埋没流出せしめ一瞬にして幾多の尊き人命を奪い而も祖先傳來の田畑は砂礫の河原と化し道路は寸断され交通通信は全く杜絶し惨状人をして目を蔽はしむ實に本村未曾有の大災害たり爲に村民の生活は根底より覆され永年の平和郷も荒廢その極に達せり爾來三星霜能くその廢墟より立上がり營々苦心の結果復旧の功漸くその半ばに達せる今日茲に記念の碑を建立し災禍の惨状を記して後世に遺さんとす

昭和三十一年八月十五日建之

○木津川市山城町 南綺田 南山城水害



(碑文 要約)

昭和 28 年(1953)8 月 15 日未明、南山城地方を襲った前日からの集中豪雨により天神川、不動川など旧山城町の 4 つの天井川が決壊し、死者 32 名、負傷者 602 名という大災害が起こった。とりわけ、天井川に囲まれた棚倉地域、高麗地域に被害が集中した。

※京都府の当時の土木工営所長の氏名「小出弘之」も刻まれている。



洪水被害状況（木津川市山城町綺田地区）

京都府砂防協会発行の「京都府の昭和28年災害」から引用

○木津川市山城町 北平尾 南山城水害



↑ 刻印付



↑ 鳴子川橋の親柱

(碑文 要約)

昭和 28 年(1953)8 月 15 日未明、南山城地方を襲った前日からの集中豪雨により旧山城町の 4 つの天井川が決壊し、死者 32 名、負傷者 602 名という大災害が起こった。とりわけ、天井川に囲まれた棚倉地域、高麗地域に被害が集中しており、棚倉地域では 24 名が死亡、家屋流出 19 戸全壊家屋 30 戸であった。

○木津川市山城町 北河原 南山城水害





↑ 刻印付

(碑文 要約)

昭和 28 年(1953)8 月 15 日午前 4 時、南山城地方を襲った前日からの集中豪雨により鳴子川など旧山城町の 4 つの天井川が決壊し、死者 32 名、負傷者 602 名という大災害が起こった。とりわけ、天井川に囲まれた棚倉地域、高麗地域に被害が集中しており高麗地域の北河原区では 7 名が死亡した。

●木津川市木津 正覚寺境内 洪水供養阿弥陀石仏 水害





(碑文 原文)

(右面)

正徳二年（1712）辰八月十九日洪水によって、此川筋の近在辺境の人民おぼれ、死するもの幾千人といふ数をしらす

(中央面)

今日第三回忌にあたるをもつて、彼亡者のぼだいのため、此阿弥陀仏を造立し、ながくここに安置し奉る。かねては又、

(左面)

往來の貴賤男女をしてこの尊像を拝し心々の回向をなさしめ自他平等の利益とせんことを願ふのみ

(他の六角面)

正徳四（1714）甲午天八月十九日、願主 京都住人 大八木弥右衛門 敬白

●木津川市木津殿城所在地 関東丹後但馬大震大災死者大菩提 地震





(碑文 原文)

関東丹後但馬大震大災死者大菩提

●木津川市山城町 泉橋寺 水害



(碑文 背景)

1292年正応5年の洪水の水害横死者の供養を目的として1295年から1308年までの13年かけて作られた。

日本一の石造地蔵、高さ4.58m。

(木津川市観光ガイドHPから引用・諸説あり)

東大寺を建てていたころのお話です。木津川の水運を使って材木を切り出していました。水が多すぎても少なすぎても、材木はスムーズに運べませんでした。

ある年、雨が少なく笠置あたりで材木が止まり、水を堰き止めるかたちになってしまいました。下流の田畑は干上がる恐れがありましたので、大騒ぎになりました。そこで、行基様というお坊様におすがりすることになりました。翌日から行基様のご祈願が始まりました。そして満願の日、あつという間に大雨が降りました。みんなは喜びましたが、惨事も起こりました。谷間を流れる木津川の急流は激しい流れとなって、川の中で働いていた人を呑み込んでしまいました。行基様は自身の罪のように嘆かれ、お地藏様を供養することになりました。そんなある日、行基様の枕元にお地藏様が立たれ、「木津川を見守るために日本一の高さにしてほしい。立っているばかりでは疲れるので座らせてほしい」と言われました。翌日、行基様は言いつけどおり大きな石を木津川から取り出しました。こうして作られたのが、泉橋寺のお地藏様です。戦火や風雨があるのでお堂を作ろうという人もいましたが、「お堂が無いほうが木津川の流れが良く見えます」とお地藏様がお断りになったそうです。

●和束町 大井手用水災害復旧 南山城水害





(碑文 背景)

瓶原は恭仁京の頃から水利の便が悪く、畑ばかりで米の収穫が殆どないところであった。農家は旱魃の被害を受け困窮していた。

鎌倉中期（1222）海住山寺慈心上人の努力で和東川から水を引き、10数年かけて約7kmの大農業用水路（大井手用水路）を造った。当時は機械などなく、全て人手で山肌を拓き、岩を削る大変な工事であった。

これにより瓶原の米の収穫量は約600石から江戸時代には2500石までになった。

昭和28年、南山城大水害で一部損壊し、下流に井堰が新設されたが800年経った今もその当時の基本的な仕組みは変わることなく農業用水として利用されている。

●和東町 和東中学校門前 南山城水害



(碑文 背景 京都新聞記事 2013年4月22日)

1953(昭和28)年の南山城水害で、京都府和東町は和東川の水位が6メートルも上昇した。町を貫くこの川の氾濫で、死者、行方不明者は112人(京都府調べ。当時の西和東、中和東、東和東村の合計)に上った。

西和東村に住んでいた竹谷奈代さん(73)＝和東町石寺＝は当時中学2年生。川沿いの商店で祖父、妹と3人で暮らしていた。8月14日の夕方から降

り始めた雨は深夜にかけて猛烈に勢いを増した。

「早よ起きてこーい」と祖父の声で目を覚ました。川が道の高さまで来て、水がたぶん、たぶん、と出てくるのが見えた。見る見るうちに道が川になってしもうて、店先に水が滝のように入ってきて、ぐるぐるっと渦巻いて商品を持って行った。「流れるー」と止めようとしたが、まるで津波のようやった。

はず向かいのたばこ屋は少し高い場所で、無事だった。祖父が「値高いもん（商品）を運べ」というので、水に浮いた商品を踏み、腰まで漬かりながら、たばこ屋まで何回か酒を運んだ。そうしていると近所のおじさんに「われ何してんのぞーっ」と怒鳴られた。「酒運んでんねんかー」というと、「こんな時に何言うてるかーっ」と、酒瓶を持ったまま引きずり上げられた。

そこも水が増え、土手に上がった。そこで無事だった妹と会えた。家が流される時、ガラスが「バババーン」と音を立て、魚みたいに飛び散って上がるのが見えた。

上流の中和東村は死者、行方不明者の大半、101人という大きな被害を出した。橋や道路が寸断され、救援も遅れた。川沿いに家があった山口正和さん（71）＝同町釜塚＝は、暗闇の中、必死で避難した。雨はバケツで頭から水をかけられたような感じやった。あたりは真っ暗で、雷がピカッと光ると同時に家族で走って山の方に逃げ、無事やった。

親戚が笠置の方から来たが、橋が全部流れて近づけなかった。救援部隊は、宇治田原方面からリュックサックを背負って山越えで物資を運んでいた。ヘリコプターが運んできたドラム缶入りのミルクの粉を溶かして飲みました。

妻の忍さん（66）も近くで水害を体験した。雨が降り始めたころ、川沿いの親戚の家にいた。盆踊りの季節で泊まるつもりだったが、父親が迎えにきた。ぐずる忍さんを親戚の若者が「またあしたおいで」と説得して帰らせた。その夜、その家は流され、親戚たちはみな亡くなった。親戚のお兄ちゃんが私を背負うためのへこ帯を父に渡したのを覚えている。家に帰ってから父が親戚に避難を呼び掛けに行ったが、もう近づけなかったそう。父は「『助けてー、助けてー』という声が耳から離れん」と言っていた。今でも慰霊碑に手を合わせるたびに、私が113人目やったかもしれん、と思う。



和束川の氾濫で被害を受けた中和束村の家屋（1953年8月15日、和束町役場提供）



○亀岡市 平和池ダム跡地 平和池水害



平和池災害モニュメント

1951(昭和26)年7月11日のあの水害事故から60年の月日が経過しました。ここに改めて、平和池水害により尊い命を亡くされました御霊に、衷心より哀悼の意を表します。平和池水害は、亀岡市にとって決して忘れてはならない災害であり、その惨禍と教訓を後世に引き継ぐことこそ、「いま」を生きる私たちに課せられた大切な使命であると存じております。

亀岡市におきましては、毎年8月を平和月間とし、8月7日には「平和祈念式典」を挙げて過去の戦争で犠牲となられました戦没者とともに、平和池水害により命を亡くされました方々に対し、弔意と平和への決意を表しております。また、広く市民の皆様に犠牲者の鎮魂と恒久平和の希求を呼び掛け、今日ある平和な社会は、過去の戦禍や災害を被られた方々の尊い犠牲のうえにあるものと、市民の皆様の認識を新たにしているところです。

地域防災の「要」は、これら災害の歴史を風化させることなく、次の世代へ語り継ぐことです。平和池水害60年を機に、亀岡市民一人ひとりが命を大切にし、安全で安心して暮らせるまちづくりをこれからも積極的に推し進めてまいります。

2011(平成23)年9月 亀岡市長 栗山 正 啓

(碑文 要約)

昭和26年(1951)7月11日9時40分、集中豪雨で防水ため池である平和池ダムが決壊した。亀岡市内では114名(柏原区75名、旧亀岡地区21名、その他地区18名)が亡くなり、家屋の流失・全半壊268戸、床上浸水152戸等、下流の篠町柏原地区を中心に多くの被害が発生した。

○亀岡市 篠町柏原 年谷川堤防 平和池水害



(碑文 要約)

昭和 26 年 (1951) 7 月 11 日未明からの豪雨により、年谷川が増水・氾濫する中、上流の平和池ダムが決壊した。氾濫の濁流と決壊の鉄砲水が高さ 2m から 3m もの黒褐色の大波となって篠町柏原地区を襲い、美しかった街並みは一瞬にして泥海の底に沈み、死者 75 名、家屋の流失 30 戸、全壊 22 戸、耕地 30 ヘクタールが流失する被害となった。

○亀岡市 矢田天満宮 平和池水害



(碑文 要約)

昭和26年(1951)7月11日、集中豪雨により防水ため池の平和池が決壊した。年谷川に数メートルの小山のような濁流が轟音とともに押し寄せ、上矢田町内では死者17名、流失家屋10戸、耕地流失等の被害が生じた。災害は忘れた頃に来るといっているので、この災害を次世代に伝えるため、この水害で流失した橋の石材を用いて碑を建立した。

● 亀岡市 亀岡駅南 水害標識塔



(碑文 要約)

昭和 35 年 8 月 30 日台風 16 号による浸水深 9m25cm を明記

● 亀岡市 鵜ノ川左岸堤防 改良記念碑 水害



(碑文 原文)

鵜ノ川ハ、山城國大原野村小塩山淳和帝陵ノ聖域ニ發シ、丹波國篠村ニテ桂川ニ注ク流程六秊流域十二秊平方秊ノ小河川ナリト雖モ概ネ急峻ナル溪谷ヲ奔リ下流ニ於テ纔ニ耕地ヲ展クノミ迂曲甚シク河積狭小ニシテ古來降雨毎ニ沿岸ノ被害絶ユルコト無シ此ノ故ニ明治四十年四月砂防指定地ニ編入セラレ爾來山腹及溪流ノ砂防施設二十三萬餘圓ノ巨費ヲ投シ專ラ災厄ノ防止ニ努メタルモ昭和十季六月及八月京都地方ヲ襲ヒタル稀有ノ豪雨ハ、一瞬ニシテ護岸ヲ毀チ堤防ヲ破リ橋梁ヲ流出シ耕地ヲ荒廢セシムル等未曾有ノ暴威ヲ振ヒ其ノ復旧費十三萬九千餘圓ニ達セリ茲ニ於テ京都府ハ此ノ復旧費ヲ以テ本川ノ根本的改良計畫ヲ樹立シ昭和十一年十一月起工シ本季五月其ノ工ヲ竣ウ幅ヲ廣ゲ岸ヲ固メ流路ヲ整齊シ又堰堤ヲ設ケテ水流ヲ緩和シ灌漑ニ便セシム今ヤ舊態全ク改マリ沿岸ノ庶民ハ水禍ヲ免レ其ノ惠ニ倚托スベク仰キ望ム大原野陵ノ翠岳ト共ニ永ヘニ沿岸ヲ裨益シテ淪ルコトナカラシ 即チ篠村村民欣喜シテ沿革ヲ碑ニ刻シ後昆ニ貽ス

昭和十三年六月 焉建

「京都府土木部長 岩崎雄治書」と記載されており、昭和13年当時は京都府には土木部という名前の組織があったことがわかる。

○亀岡市 東別院村 水害



(碑文 要約)

昭和26年(1951)7月11日午前7時頃、雷を伴う集中豪雨により、各河川が濁流となって氾濫し、田畑や家屋が浸水、流失、埋没した。ここ東別院町では4名の尊い命が失われ、全交通機関が途絶し、電灯電話も切断されて全くの孤立状態となった。

当時の京都府林田知事の揮毫。

●南丹市八木町 大堰橋上流右岸堤防 水害





(碑文 原文)

殉難碑文

昭和三十五年八月二十九日夜半ヨリ三十日の払暁にカケテ襲来セル台風十六号ハ集中豪雨ヲモタラシ八木町全地域ヲ水禍ノ巷ト化ス 町ハ直チニ災害対策本部ヲ設置シ災害救助法ノ適用ヲ受ケ自衛隊ノ派遣ヲ要請セリ

偶々陸上自衛隊福知山部隊ハ救助ノ任務ヲ帯ビテ急遽来町 舟艇ヲ操リ大堰川ヲ横切ラントシ 一等陸曹 服部政男 陸士長 谷川信雄 同 柳原正明ノ三隊員ハ遭難 敢然トシテ職ニ殉ズ ソノ志ヤマコト隣人愛ノ発露ニシテヨクソノ責任ヲ果シタルモノト言ウベシ 三隊員ハ平素自衛官トシテ本務ニ励ミ忠誠ノ誉 高カリシモノ 今大堰ノ川瀬静カニシテ勇士ノ面影ヲ偲ブニ由ナシ 町民深く感激 痛惜ノ情巳ミ難ク茲ニ頌徳ノ碑ヲ建テ水防守堤ノ鎮護トシテ永ク遺芳ヲ讃仰セントス

(碑文 背景) 2019年08月30日 09時53分配信 京都新聞

京都府南丹市八木町の桂川で1960年、水害の救助活動中に亡くなった自衛隊員3人の60回忌の慰霊祭が29日、桂川右岸の殉難碑の前で営まれた。自衛隊関係者らが隊員の冥福を祈り、防災への思いを新たにしました。

60年8月29日、台風16号の影響で、大規模な水害が八木町で発生。陸上自衛隊福知山駐屯地の隊員が救命ボートで桂川を渡ろうとした際に転覆して3人が亡くなった。慰霊祭には3人が所属していた第7普通科連隊重迫撃砲中隊の隊員やOBの会「福重会」のメンバーら15人が参列した。僧侶による読経の中、参列者は慰霊碑に手を合わせて焼香していた。福重会の柏原道央会長

(69)＝兵庫県丹波市＝は「全国で水害をはじめ、今までに経験したことがない災害が相次いでいる。八木での事故を風化させないようにしたい」と話した。

●南丹市美山町 大野ダム 水害





出典：京都府大野ダム管理事務所「大野ダムの洪水調節について」（財団法人ダム水源地環境整備センターHP より引用）

（碑文 原文）

大野ダムにおける最高水位標 2013 年 9 月 16 日の台風 18 号での最高水位 EL175.37m 及び 2004 年 10 月 20 日の台風 23 号での最高水位 EL173.54m を明記

（碑文 背景）

2004 年 10 月 20 日の台風 23 号では下流域の由良川で大野ダムは、下流の洪水を防ぐために貯水を続けていたが、流入水量が多く、水位が上がってサーチャージ水位（これを超えるとダムから水があふれることになるため、洪水時でもこれを超えることが出来ない最高の水位）に到達することが予測される事態となった。ダムの操作は操作規則で定められているが、このようなときには、ダムがあふれるような事態を避けるため、放流量を流入量と同じ水準になるまで徐々に増やしていくのが一般的ルール。ところが、下流でバスが立ち往生し、37 人が救出を待っていた。このとき、人命尊重のため、ぎりぎりの判断であふれる直前まで放流量を抑えバスの屋根にいた 37 人は流されることなく、全員が救助された。ダム操作の責任者である当時の京都府土木建築部長は、操作規則を逸脱することから知事あての進退伺いを内々に手にしていたとのことである。

●京都市南区 天神川（現西高瀬川）改修碑



(碑文 原文)

改修之碑

夫天神川者貫流北野吉祥院兩天滿宮而遠注於淀江矣昔連曲為運輸之便今反而氾濫年年蒙其害不少也町村自治村長安田益太郎初圖天神川改修之事而村長石原磯次郎亦繼而尽力猶未至於實行大正十四年中塚儀一郎村長時有本村編入京都市之議売却村有財產以當改修費安田英之助深見徳次郎是主称始見村会一致之決議多年之懸案漸成焉然而昭和三年現村長平塚繁治郎組織東部耕地整理組合而依前設

計直起工充改修費一万四千五百円四月二十五日竣工初挙渡橋式也惟此業村民常
仰 菅公威徳堤上植樹以連神苑拓路便宜深広河幅日夜吞吐於西部下水以後除
尽水害焉此用旧橋梁石材成碑為永記

組合長平塚繁治郎 組合副長深見徳次郎 工事係 石原長太郎 石原藤松
山下茂兵衛 田中末吉 安田信之助 設計者 島 貞仁 藤原俊直 工事者
増田伊三吉 昭和三年四月二十五日 撰文書者 小木曾善弘

(碑文 要約)

天神川は北野・吉祥院の両天満宮を經由して、遠く淀川に注ぐ川である。むかしは曲流し運漕に便利だったが、今では逆にたびたび洪水をおこし、吉祥院村は被害をこうむった。村中安田益太郎が最初に改修を企画し、村長石原磯次郎も継承して尽力したが実行には至らなかった。ところが大正14年(実は同7年)、中塚儀一郎が村長在任中に吉祥院村は京都市へ編入された。その時にあたり安田英之助・深見徳次郎が首唱し、村有財産を売却して工費にあてることが村会で議決され。多年の懸案がやっと実行に移された。昭和3年現村長平塚繁治郎は東部耕地整理組合を組織し、これまでの設計にしたがいすぐに起工した。改修費には14500円が充当された。昭和3年4月25日に竣功し渡橋式を挙行した。工事の完成はひとえに菅原道真公の威徳によるものだと、村民は堤防の上に植樹し吉祥院天満宮の神苑に連なり、道路を整備し河幅をひろげ、日夜京都西部の排水を導き水害の憂いをなくした。ここに旧橋梁の石材を利用し碑を建ててである。その時かけかえられた高畑橋の旧石材を利用し、石碑を建てて記念とする次第である。

天神川(現西高瀬川)は屈曲し水害のおそれが常にあったので、地元吉祥院村ではその改修が懸案になっていた。村では大正7年の京都市編入を機とし、村有財産を処分して着工し、昭和4年に竣工した。この碑は吉祥院村による天神川改修を記念するものである。この碑ははじめ天神川(西高瀬川)の高畑橋畔に建立されたが1967年の架橋工事時にゆくえ不明となったが1992年に再発見され現在地に再び建てられた。

なお、この付近の堤防上は、長年、10台以上のダンプトラックが不法に駐車していたが、管理する京都土木事務所の指導により是正され、現在は、園路が整備されている。

●京都市右京区 御室川治水碑



(碑文 原文)

治水碑 貴族院議員正三位勲二等男爵 北垣国道 篆額 山田得多書
平安城西双岡以南田野平曠村落相望御室川貫其間南流入桂川平時水涸無涓 滴
暴雨則濁流奔溢毀 沒田其害甚大脩治之費役作之勞村民常患之京極村長 湯川
半左衛門等相議大改脩之梅津西院吉祥院三村咸贊之遂請官得允明治三十三年十
一月朔工三十八年一月告竣改流域減長十二間餘而加広二間廢沿川地五千八百九
十步脩兩長各千六百八十間餘高一間六分厚三間而其上殺三分之二費金貳万九百

八拾円其六出於官其四係村民之出於是村民始免積年之患矣乃相喜曰嗚呼是舉也能除難除之害以永福利宜建碑不朽其功遂來索予文予以郡宰親董是役當事吏胥皆能竭力規畫以致是喜而村民之喜乃予喜也因不辭而係以銘不溢不壞偉哉治水一片貞 紀功志喜明治三十八年六月京都府葛野郡長從六位勲六等有吉三七

組管理者葛野郡長 有吉三七

關係村長 梅津村長 小山弥三郎西院村長 西村口太郎元西院村長
太田時治郎京極村長 湯川半左衛門吉祥院村長 石原菊太郎元吉祥院村長
小原伝之丞同 岡崎清右衛門 油小路魚棚北 石巳

(碑文 要約)

京都の西郊では、双丘より南は田野が広がり、その中に村々が点在していた。御室川はその田野の中を流れ桂川に合流する川である。ふだんは水が少ないのだが、大雨になると濁流があふれ耕地をひたし、その損害は大きなものがあり、川普請の経費や労力は流域村民の悩みの種だった。そこで京極村村長湯川半左衛門らは大規模な治水工事を企画し、流域の梅津・西院・吉祥院の三村もこれに賛同した。計画の認可を受け、明治33年11月に起工し、同38年1月に竣工した。この工事で川の流れは12間あまり短くなり、川幅は2間拡張した。川沿いの土地5890歩を供して堤防を作り、その延長は両岸おのおの1680間余で高さが1間6分、下部で厚さ3間、上部で2間にも及んだ。総工費は20,980円で、6割が京都府から支出され、4割が地元負担であった。

治水工事の完成で永年の悩みが解決され、村民はこの業績を顕彰するために石碑を建てることを計画し、私(葛野郡長有吉三七)に碑文を依頼した。私は郡長としてこの工事に関係し、配下の者もよく力をつくして完成に至ったのである。すなわち村民の喜びは私の喜びでもある。このためあえて文を作った次第である。

○綾部市 水の記憶の碑小公園 水害





(碑文 要約)

昭和 28 年(1953)9 月 25 日、台風 13 号により正午から夕刻にかけて由良川上流では時間雨量 30mm~60mm の降雨があり、総雨量は 3 日間で約 500mm に達した。昭和 28 年の大水害という自然の猛威を市民の記憶にとどめ、同時に水の恩恵を忘れないために、大洪水を耐え抜き由良川と綾部の街にとって象徴的な存在となっている綾部大橋の旧親柱を「水の記憶の碑」として設置。

○福知山市 福知山河川国道事務所隣接地 水害





(碑文 要約)

改堤碑

明治 29 年(1896)8 月 30 日、夕方には豪雨となった雨のため、由良川の水位は約 9.7m に達した。京口、広小路口など各所で堤防が決壊し、家屋流失 300 件余り、溺死者 230 人余り、負傷者 200 人余りの被害があった。

また、明治 40 年(1907)8 月 26 日の洪水では、京口、明覚寺裏、広小路口のほか各所で堤防が決壊し、溺死者 5 名、負傷者多数の被害があった。

○福知山市 由良川左岸堤防 水害







(碑文 要約)

二十八災 堤防決潰之地

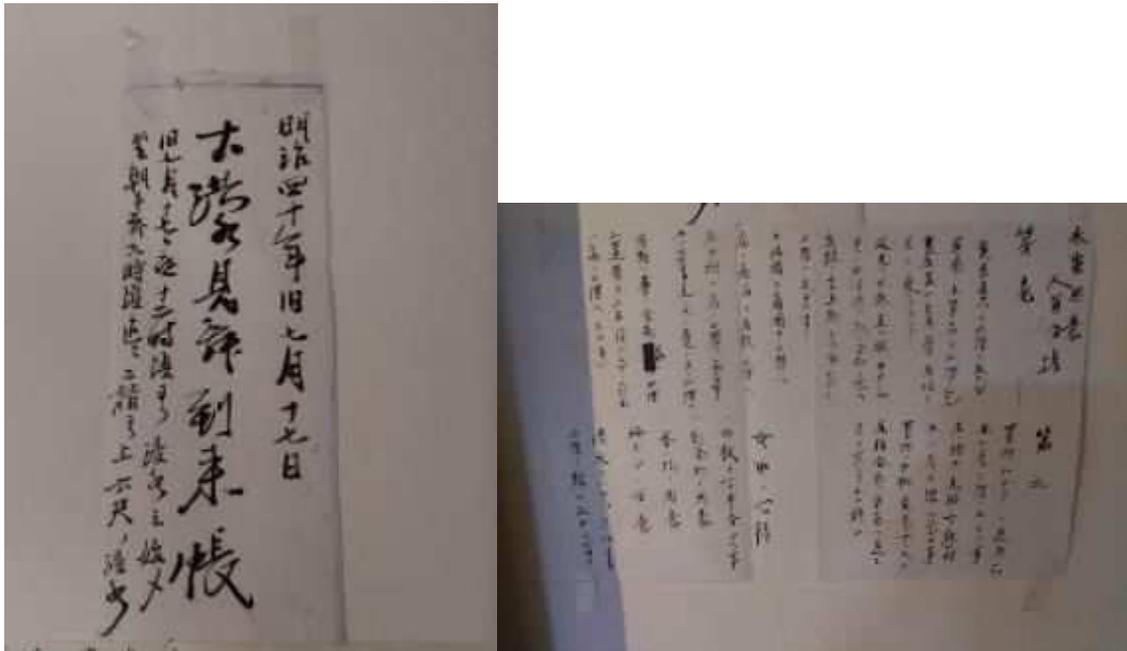
昭和 28 年(1953)9 月 25 日、台風 13 号により正午から夕刻にかけて由良川上流では時間雨量 30mm~60mm の降雨があり、総雨量は 3 日間で約 500mm に達した。同日午後 9 時頃には和久市の堤防が決壊し、福知山市では死者 4 名、家屋流失・浸水家屋約 5 千 5 百戸を数えた。流域の綾部市、大江町(現 福知山市大江町)でも被害があった。

●福知山市 治水記念館 水害



[東灘区治水記念館の展示品]					
1988年	7月20日	8時 21分	新神戸小学校	7.28m	水
1987年	7月20日	8時 26分	兵庫・東灘区立東区	8.46m	水
1987年	7月21日	8時 29分	新神戸小学校	7.27m	水
1986年	7月20日	8時 33分	兵庫区立中央小学校	7.80m	水
1985年	7月20日	8時 36分	多摩川小学校	7.10m	水
1972年	7月20日	8時 37分	兵庫区立中央小学校	8.25m	水
1962年	7月20日	8時 42分	兵庫区立中央小学校	8.46m	水
2009年	7月20日	10時 20分	兵庫区立中央小学校	7.22m	水
[東灘区治水記念館の展示品]					
2013年	7月20日	8時 25分	兵庫区立中央小学校	8.00m	水
2014年	7月20日	8時 27分	兵庫区立中央小学校	8.00m	水
2017年	7月20日	10時 23分	兵庫区立中央小学校	7.20m	水
2019年	7月20日	7時 27分	兵庫区立中央小学校	8.22m	水

スイッチの赤色灯が消えたら



(施設 背景)

由良川の水害との闘いの歴史と、これからの水防のあり方の重要性を伝える施設として、築140年の町家を改修して整備された施設。

記念館の建物は明治10年代に建てられたもので、屋根裏には水害時の避難場所となる大きな空間を設け、避難時の荷揚げ用滑車など、水害に対する備えが工夫されている。

福知山の町家（商家）を象徴する歴史的価値の高い建物で、明治から大正・昭和にかけての商家のたたずまいが残されている。

洪水時、荷物を上げる「タカ」、浸水模型、水位モニユメント、明治40年の洪水時の水害での経験を踏まえた洪水に対する用意に対する人員分担資料、2階の襖のところまで来た水位の痕跡の展示。

●福知山市 法川排水機場 水害



(碑文 要約)

由良川は京都府滋賀県及び福井県の境にある標高 959m の三国ヶ岳を源とし、福知山盆地を経て宮津市由良で日本海に注ぐ流路延長 152km、流域面積 1882 平方km、京都府の面積の約 40% の大河である。その清流は農業を主とするさまざまな生産基盤と、生活環境を生み出し育ててきた母体である。

沿川に開けた城下町福知山が陸路水路の要衝として発展してきたのも、由良川によるところが大きい。しかし、一方自然河川であったため洪水により、過去幾度となく大災害を招き、尊い人命や貴重な財産が失われてきたのも事実である。

とりわけ明治 29 年、同 40 年、そして昭和 28 年の洪水は大災害をもたらした。昭和 28 年 9 月 24 日台風 13 号による由良川水位福知山地点は、同 25 日

午後 11 時、過去最高の 8.1m を記録し、和久市及び猪崎付近の堤防が決壊。市街地を中心に受けた大惨事を忘れることはできない。

水害から何とか免れたい、由良川を愛しながらも、その治水対策は長年にわたる住民の切実な悲願であった。由良川及び土師川の本格的な堤防補強工事は昭和 31 年 5 月から開始され、この付近にあった蛇ヶ端樋門も当時造られたもので、洪水時法川への逆流を防いだ。

昭和 41 年には一級河川に編入改修事業は年々促進された。とりわけ昭和 49 年に完成した支流和久川の改修によって内水禍をほぼ解消。市街地を西方へ大きく拡張することとなり、さらに内水禍を完全に解消するため、ポンプ場の建設が進められている。また堀地区の内水禍を防ぐため、昭和 48 年から着工された法川排水機場が、昭和 53 年 3 月に完成。これによって荒河に至る約 3.5km に及ぶ市街地を守る治水事業がほぼ完工したことになる。この付近も由良川の水勢をやわらげるため、古くから植えられていた竹藪が今も一部、その面影を留めてはいるが、日に日に近代河川に生まれ変わり市民の悲願が実りつつある。

私達は由良川の洪水と内水による苦難の歴史を忘れることなく、そして再び災害を被ることなく、母なる川・由良川の流れとともに躍進福知山市を築いていかなければならない。

法川排水機場の完成を機に、治水事業に格段の御努力をいただいている建設省並びに、関係市民各位に心から感謝の意を表し、ここに記念碑を建立する。

昭和 53 年 4 月 福知山市

●福知山市 堤防神社 水害



(碑文 背景)

福知山は古くから、由良川の氾濫に悩まされてきた。天正8年（1580）に光秀が由良川の付け替えや堤防造営を行って以降、さまざまな治水工事が行われ、水害は減少した。このことから福知山市では、氾濫を抑える大切な役目を担う堤防に感謝して、毎年8月15日に堤防祭りが行われている。これに伴い昭和59年に建立されたのが、日本で唯一の堤防を御神体とする神社である。過去の水害を忘れないための拠り所とされている。

(碑文 背景 農林水産省 HP から引用)

由良川が綾部、福知山市域の平野部に入るところに、この地域の主要な取水施設の1つである「綾部井堰」があります。この井堰を守り続け、綾部用水の基礎を築いたのが 近藤勝由でした。勝由が綾部落きっての井堰の専門家となったのは、土木好きのうえ、関東地方で発達した河川工事、井堰などについて熱心に研究したからです。1866年の洪水により、綾部井堰の下流にあった天田井堰が大きな被害を受けました。そこで勝由は、天田井堰と綾部井堰を統合しようと考え、約900メートルの水路を掘り、2つの井堰の水路をつなぐ計画を立てました。困難で無謀な工事だと農民からの反対にあいましたが、勝由は私財を投げうって工事に取りかかりました。勝由は、昼夜現場に立って指揮をとり、わずか40日で完成させました。これにより、綾部用水の基礎が築かれたのです。

その後も井堰は洪水で破損し、1884年に井堰の改修が計画され、当時郵便局長であった勝由に依頼がありました。井堰と関係のない役職にもかかわらず、工事の責任者を引き受け、地域の水不足の解決に力をつくしました。

現存する井堰は、1953年の大災害後に造り替えられたものですが、勝由の行った業績は、綾部井堰の功労者として今なお語り継がれています。

(碑文 要約 京都府中丹土地改良事務所 2003年3月発行パンフレット冊子から引用加筆)

近藤勝由の事績

氏は文政10(1827)年、綾部落に生まれる。性剛直苟くも意思を枉ざるの風あり。土木はその最も長所にして、理財にまた長ず、嘉永元年綾部落代官となるや、土木のことを兼ね司り部内の土木に竭せしもの慚からず、就中天田堰を綾部堰に合併したる功績の如きは其の最顯著なものとす。

綾部、天田両堰は、共に由良川の流域にありて灌漑反別一は130余町歩、一は170町歩に渉る大堰になりしも往々洪水に際しては堰体を破壊せられ、其復旧維持は村民の最苦痛とする処なりしが、慶応2年8月大洪水あり、天田堰遂に流失し、その復築蓋容易の業にあらず、村民の憂苦困憊非常なるものあり、ここに於てか氏は断然天田堰を廃し綾部堰に合併せんと欲し、之を

藩主に献策して嘉納せらるるや当時衆皆其成功を疑ひ異論百出するに至りしも、氏之に動ぜず日夜鋭意計画に力め、時の大庄屋羽室嘉右衛門氏等と相謀り、2月28日起工、隸下の部民を使役して以て日夜これを督励し延裏より大島に至る長さ8町余濶、12尺草萊を拓きて岩石を砕き苦心慘愴難工事を短日にして天田堰なる井溝に連続、遂に目的を達したり維時3月8日なり、茲に於て綾部堰の一大水路を以て延長2里余に亘る元両堰の区域全部に灌漑せしのみならず、将来の維持費を節減して経費多大の利益を得せしめたり。

尚又明治17年8月大洪水がありて、由良川筋に築造せる井堰及樋閘等破壊せらるる処多く、衆議之れが復旧工事の施行を氏に囑託するや、是亦3旬の短日にて竣成せり。

而も其工事の困難なりし事、前日の比にあらざるといふ、ここに於て明治25年組合員等氏の功績を不朽に伝ふとし、元何鹿郡長宮崎清風氏に撰文を囑し之れを碑石に刻み綾部堰の西岸に建立せり。之れ現在の原碑なり因に氏は明治34年9月齡75才を以て没せり。

●京都市上京区 清浄華院 強風による大火



何 翠 月 湖
也 狂 風 旋
都 督 松 平





(碑文 原文)

焼亡横死百五十人の墓 (隣の石碑には、「狂風」と記載されている。)

(碑文 背景)

天明8年1月30日(旧暦)(1788年3月7日)に京都で発生した火災で、出火場所より団栗焼けとも呼ばれている。近世の京都で発生した最大規模の火災であり、皇居や二条城などが焼け落ちるなど深刻な被害であったために当時の社会に衝撃を与えた。宝永・元治(どンドン焼け、禁門の変に伴うもの)と並んで「近世京都の三大大火」とも言われている。1月30日の未明、賀茂川東側の宮川町団栗辻子(現在の京都市東山区宮川筋付近)の空家から出火、折からの強風に乗って南は五条通にまで達し、更に火の粉が鴨川対岸の寺町通に燃え移って洛中に飛び火した。その火の夕方には二条城の本丸が炎上し、続いて洛中北部の御所にも燃え移った。

最終的な鎮火は発生から2日後の2月2日(旧暦)未明であった。この火災で東は河原町・木屋町・大和大路まで、北は上御霊神社・鞍馬口通・今宮御旅所まで、西は智恵光院通・大宮通・千本通まで、南は東本願寺西本願寺両本願寺・六条通まで達した。御所・二条城のみならず、仙洞御所・京都所司代屋敷・京都町奉行・摂関家の邸宅なども焼失した。京都の町代を務めた古久保家の記録によれば、焼失した町1,424、焼失家屋36,797、焼失寺院201、焼失神社37とされる。死者については150人説と1,800人説がある。この大火に江戸幕府も衝撃を受け、急遽老中松平定信を京都に派遣して朝廷と善後策を協議した。また、この直後に裏松固禪によって『大内裏図考證』が完成され、その研究に基づいて、古式に則った御所が再建されることになるが、同時に朝廷の動向が世間の注目を集めるようになり、尊号一件などの紛争の遠因となった。

●京都市上京区 円通寺 強風による大火



(碑文 原文) 為焼亡横死

(碑文 背景) 清浄華院と同じ「天明の大火」

●舞鶴市和江 瀬戸島開紀功碑 水害





（碑文 背景）

慶長 3 年に細川幽斎が二位座に櫛の実の模範畑を造り、また翌 4 年由良川への突出部を切断して流勢をやわらげようとし、この部分が瀬戸島として残った。寛永 2 年、開削工事により洪水となり、田畑が流失した。大正 2 年京都府の工事で細川忠興の取り残した瀬戸島の削り取り高田耕地が造成された。昭和 18 年渡船場が廃止され、昭和 41 年瀬戸島水際部分の掘削と西島取除きの廃土により、和江の谷・西島新田の埋立てが完了した。

●福知山市 一級河川土師川河川災害復旧助成事業完成記念碑 水害





(碑文 原文)

昭和 58 年 9 月 28 日台風 10 号の接近に伴う豪雨により、三和町兔原で 338 ミリを記録した。28 日 9 時から 14 時にかけて、この最大時間雨量は兔原で 76 ミリを記録し、土師川の水位は岩間観測所で 28 日 15 時警戒水位 3.50m を突破し、17 時には、警戒水位を 0.68m 上回る最大水位 4.18m を記録した。これにより、本川及び支川の堤防護岸が決壊し、浸水家屋 211 戸、農地冠水 10.822ha 及び土石流の発生により、一人の尊い命が失われた。この惨事から 1 日も早く脱すべく福知山市で土師川改修促進同盟会を、三和町で土師川水系河川改修促進同盟会をそれぞれが結成し、国府に対し、土師川水系の全面的改修を強く要望し陳情した。幸いにして林田悠紀夫知事の英断により、京都府が事業主体として、土師川河川災害復旧助成事業に採択され、昭和 59 年 4 月京都府土師川改修工事々務所を新設、爾来 5 年間で土師川総延長 49.4 キロ総事業費 204 億円の巨費を投じ、霞堤、連続堤、山付堤を配し、河積の拡大護岸の整備等全面的改修をした。

こうして、長年の悲願であった災害のない穏やかで無限の恵みを与える母なる川へと生まれ変わった。その由を後世に伝える為、この碑を建立する。

昭和 63 年 11 月 吉日

福知山市長 塩見 精太郎

●福知山市雲原 雲原砂防 水害







↑龍雲寺内の西原亀三村長のお墓（池田勇人の書）





(碑文 背景)

雲原砂防関連施設群は、福知山市北部の山間部に所在する。当時の雲原村は度重なる水害で農地は荒廃し、収穫量も減少して村民は過酷な生活を送らざるを得なかった。特に昭和9年の室戸台風による被害は大きく、翌年雲原村長に就いた西原亀三は、復旧工事でなく抜本的な治水工事を望み、内務省技師であった赤木正雄に施設工事計画を要請するとともに、大蔵大臣であった高橋是清に砂防工事の必要性を説き、事業予算として認められた。これにより、赤木正雄の理想的なモデル工事計画が行われ、複数の流域（総延長約12km）にわたって堰堤11基、床固工157基、流路工41基が構造的連続性を持って配置され、一体的な機能を有する砂防施設が造られた。また、土砂災害に対する安全性を確保するため、徹底的・理想的な砂防工事を目指し、農地改良・用排水路改修・林地改修・集団耕地造成・農家移転を組み合わせた総合的な地域整備事業が行われた。その結果、水害抑制の効果が得られ、かつ大規模な換地・分合により耕作地が増えるなど農業振興に寄与することとなり、雲原地区の発展に大きく寄与することとなった。施設群は、現在に至るまでその役割を維持している。このように、雲原砂防関連施設群は、昭和10年代の我が国農村復興の様相を具体的に示すものであり、歴史的な価値を有していることから、登録する。

(碑文 要約)

我が雲原村は、山々に囲まれた谷深く、昔から今日まで再三にわたって水害を受けてきた。昭和19(1944)年9月21日に台風がまたも関西を襲うと、山は崩れ谷は埋まり、橋梁は流され、田畑は耕土を流されるなど、今まで経験したことのない大変いたましい災害となり、村民はそろって、私に村長として復旧に当たるよう依頼した。私は、土木の法律規則に基づいて原形復旧した土

木当局の設計施設をよく見たが、もとへ戻すだけでは何度も被害を被り、国が度重なる対応に振り回される原因と考え、このことについて土木局広瀬久忠君に正すよう要請し、内務省技師赤木正雄君に現地をつぶさに調べ、水害を防ぐには水源部に砂防施設を設けることが先だとの考えを示された。砂防法が明治31(1898)年に公布された。この法律が存在するものの、砂防費が無く、多額の費用を捻出する手だてがなかった。そのため砂田重政君と膝を交えて話し合い、第二予備費を活用する計画を提案し、高橋是清大蔵大臣に対して実情を話し援助を訴えたところ、大臣は申し出を理解し快く引き受け、決断を渋る地方長官を更迭してまでも、金135万円を京都、兵庫、岡山、鳥取、島根の5府県に支出することを決断された。これにより本村の砂防施設に着手する事が出来た。この取り組みは全国の砂防工事の手本となるものである。本村はこの事業とともに、更に非能率的な農村の仕事をあらため、合理的機構の農村再組織を企画し、農地の交換、農家移転を断行し、引き続き農地改良事業を推し進めている途上である。顧みれば、昭和10(1935)年8月に起工してから数えること20年、所要総工費金2億6千万円を要するに至った。この間、終始一貫して赤木技師の熱心な指導と府当局の長嶺技師の努力と村民の協力により大事業が完成できた。これはひとえに高橋大臣の英断によってなしえた国づくりの基本となるものである。私は政治に携わる者の先見性を思い起こし感慨にたえず、ここに本村治水の業績を彫刻して後生に贈るものなり。

昭和27年8月15日

天田群雲原村 西原亀三

●京都市山科区 勸修小学校 室戸台風 強風





↑京都市消防局 HP から引用

(碑文 背景 山科区社会福祉協議会 HP から引用)

鏡山次郎先生の講演会

「勸修小学校 奇跡の一日 1934 0921 その時 何が?? 700名の命は こうして救われた!」が開催されました。

昭和9年(1934年)9月21日に襲来した「第一室戸台風」は、山科にも大きな被害をもたらしましたが、勸修小学校では、校長の時機を逸しない正確な決断と、それを迅速に遂行した教職員集団の力が、700名の児童の命を救ったという歴史がありました。

鏡山次郎先生は、犠牲者が出てしまった災害には慰霊と風災を伝承する記念碑はもちろん不可欠であるが、犠牲者を出さなかったことについても、風災を伝承する記念碑が必要ではないか、と話されたことが印象的でした。

当時は小学生で、実際に学校での避難行動を経験された92歳の方々からのお話もあり、大変貴重な機会でした。

●京都市伏見区 桃山高校 室戸台風 強風





(碑文 背景)

「昭和九年九月二十一日 風災記念碑」

元京都府立桃山中学校（現桃山高等学校）の室戸台風による風災を記念するために設けられた慰霊碑。同校では、第2教館（18教室）と国旗掲揚塔が倒壊。

しかし、訓練された生徒は的確に避難し1000名いた生徒教職員は1名も死傷せずは無事であった。この話を当時入洛した文部大臣が賞賛。

国旗掲揚塔ほかを関係者の努力で再建したことを後世に伝えようと記念碑を建立。

高さ約2・7メートルの石碑の背面には、559文字の漢字とカタカナがびっしりと刻み込まれている。

碑文は、当時の桃山中学校の校長が記したとされる。「我が校の永久に忘れてはならない日である」という書き出しから始まり、「台風の強風で校舎の18教室が全壊したが、犠牲者は一人もいなかった」と伝える。

●木津川市木津 木津惣墓五輪塔 水害





(碑文 原文)
 地 輪 (東面) 刻銘:「同七月十五日阿弥陀経、一万返光明真言〇〇、和泉木津僧衆等、廿二人同心合力、勸進五郷甲乙諸、人造立之各每二、季彼岸光明真言、

一万返阿弥陀経、四十八卷誦之可、廻向法界衆生」

地輪（南面）刻銘：「永禄五年（1562）壬戌、妙林口口、道心禅門、妙心道心、十月二十七日、妙口、善通、妙口、口口、口口」

（室町時代末期 永禄五年（1562）の追刻がある）

地輪（北面）刻銘：「木津郷口口口廿坪内自、未申角木屋所一段自、藤口口未以光明真言、本・・・・分、口者・・・・時正、永仁四年（1296）八月十九日」

（正応五年（1292）の造立から四年後、永仁四年（1296）の追刻がある）

（碑文 背景）

鎌倉時代、正応5年（1292年）の建立された、高さ3.6m、花崗岩製の五輪塔。

惣墓とは、一般大衆のあいだに個人墓が普及していなかった時代の葬礼儀式の一形態で、いわゆる共同墓地という意味をもち、主に大和・山城地方に分布している。

水輪にキリク（梵字）が彫刻され、地輪東面に正応五年の造立銘、北面に永仁四年（1296年）、南面に永禄五年（1563年）の追刻銘がみられる。建立年代の判る五輪塔として貴重なもので国重要文化財となっている。

伝承によれば、木津川の氾濫で死亡した人々の供養のために建立された。

●京丹後市峰山 峰山小学校 地震





↑峰山市街(峰山町)

被災6日後の市街の風景。焼野原と化した被災地に雪が降る。

(『舞鶴・宮津・丹後の100年』より引用)





(碑文 原文)

震災殉難碑

(碑陰には、206名もの園児・児童・生徒と8名の訓導が亡くなったことが刻まれている。)

(碑文 背景)

丹後と震災（『峰山町誌稿』、『郷土奥丹後』、『縁城寺年代記』その他から引用）

震災のこよみ

大宝 元年（七〇一） 三月 大地震三日やまず、加佐郡大半滄海となる。加佐郡凡海郷全部海中に没し、高山の頂が海上に出て冠島、沓島となる。

文明 七年（一四六九） 六月十一日、丹後大地震

明応 五年（一四九八） 五月十一日、八月二十五日、同上

万治 三年（一六八〇） 正月四日、丹後、但馬大地震（卯の刻）

寛文 二年（一六六二） 五月一日、丹後大地震、天下の死人多し、二条城破損

同 六年（一六六六） 五月 宮津城内外陸へ？（魚偏に祭）多く海より上り死す。同、八月一日但馬国蛇山鳴動、地震地割れ死人多し（以上、寛文二年ともいう）。

天明 六年（一七八六） 七月、大地震、八月二十九日宮津如意寺谷大崩れ、洪水

弘化 四年（一八四七） 一月十三日、木津村中館、上野、和田、二丈余り地落、地昇、三月二十四日夜大地震

明治二十一年(一八八八) 四月十一日、宮津地震
同 二十四年(一八九一) 濃尾大地震(当地方も余震がはげしかった)
大正 十四年(一九二五) 五月二十三日、但馬地方大震災(同上)
昭和 二年(一九二七) 三月七日、奥丹後大震災(別記)

奥丹後大震災

【時刻】奥丹後大震災の時刻については、震央(震源地)を竹野郡網野町字郷とすると、二十四キロを隔てた豊岡の受震が、午後六時二十七分四十三秒八であり、二十キロの宮津は同二十七分四十三秒五であるから、まず震源地では同二十七分四十秒六から八の間、峰山地方では午後六時二十七分四十一秒一乃至二が大体正確に近いであろう。

【震源地】震源地は東経一三五度一強、北緯三五度三九付近というから、竹野郡郷村小字樋口(現在、網野町)に当たり、放射線状の亀裂があった。若狭湾の周囲には、ここを中心として放射線状に走る断層が目立って発達していて、ちょうど寄木細工のように、大小種々な地塊がよせあつまられている(『地震研究所彙報』)。これが、二年前の大正十四年五月二十三日、但馬地方の地震でガタガタにされ、昭和二年三月七日にその跡始末を受け持ったのだから、目も当てられない。地震の強さについては比較のしようもないが、丹後半島の北西部四郡五十九ヵ町村の広範囲にわたって、十倍以上の損害を与えてしまった。死者二千九百九十二名、負傷者三千七百七十二名、全焼全潰戸数六千七百九十七戸、被害家屋三万七百八十戸、損害約二千余万円(府統計による)、現在に換算すると二百倍とみても四十億円となる。

【断層】断層(地割れ、地すべり)は、南と北の二カ所に現われ、北の方すなわち郷村断層は、網野町浅茂川小字十倉海岸から、中郡を越えて与謝郡境まで、十八キロ以上もつづき、南方に起こった与謝郡山田断層は、幾地から男山まで五キロも伸びている。

震央の郷村断層は、天然記念物として保存されているし、この割れ目から取り出した自然石が、峰山小学校玄関南の殉難碑である。断層に近い小字高橋で、二間道路が南北に二メートル七も食い違っているのは、地震の最大加速度一万ミリ以上を示すもので(四辻で五千ミリ、磯で四千六百ミリ以上)、驚くべき強震である。また、食違いばかりではなく、断層の東側と西側では、七十五センチ以上も高低がついている。つまり、東側は低下して北方にすべり、西側は隆起して南方にすべったわけであ

る。郷村断層は、生野内から吉原村安区の溪禪寺西方の耕地を横切り、山を割って新治に出ているものと、峰山高等学校付近から田地を南に走って、吉原小学校前の清正公社の境内を抜けて、新治に伸びた二線がある。峰山市街は、この二つの線からはずれていながら、被害の大きかった原因は、人家が密集していたうえ、四十一カ所の出火がわざわざいたものである。

生野内断層は、高低六十二センチ、食違い一メートル八五、ことに花崗岩の断層は珍しく、天然記念物に指定されているが、高低六、七十センチ、食違い二メートル、割れ目の幅一メートル二、深さ二メートル四である。

なお、峰山高校の下では、高低七十センチ、食違い五十センチ、新治では高低六、七十センチ、食違い一メートル余となっている。また、山林内の亀裂は、今も所々に跡をとどめているが、田畑では耕土を移して傾斜を直すとか、隆起した断層の線を畦にして、上下二つの田にしたてるなど、当時の痕はなく、道路の亀裂は、柴木などを投げ込んでその上を歩いていたが、割れ目はいつか狭くなって、別に土を運ぶまでもなく復元してしまった。

陸軍の陸地測量部では、震災前の測定を基準にして、両丹境の烏ヶ嶽と、丹但境の床尾山によって調査したところ「断層は東側一米三、西側一米滑動」と発表しているし、峰山市街では東部が三十センチ沈下し、反対に西部が四五センチ隆起しているとのことである。また、竹野郡吉沢字経塚（通称小原山）は、北に四十六度四十九分、西に一メートル九十六移動し、峰山市街を抜けて一直線に西方にあた女布谷の権現山（熊野郡女布）は南四度五十分、西へ〇・八メートル移動したともいう。

【峰山の惨状】震災の惨害は、被害地のどの町村でも起こっているが、その率と様相において最も激しかったのは峰山市街地であったろう。総戸数一千十一二戸の中、全焼八百四十九、全壊百五十七、半壊二十七、半焼二で、百%。人口四千五百八十五名中、死亡一千百三名（二十四%）、不具者十四、重傷二百二十三、軽傷二百九十三、合計一千六百三十三名で、約三十五・六一%が死傷したことになる。

ことに、当日午後六時二十七分四十一秒、激震わずか一、二秒の間に家は倒れ、十五分をまたずして市中四十一カ所から燃え上がった炎は、十八時間燃えつづけ、市街の九十七%一九を焼きつくしてしまった。昭和二年は、近年にまれな大雪で、早春三月七日というに、残雪はなお一メートルを超え、農家などの裏びさしはまだ雪に接していたが、この日は朝から珍しい快晴で、雪中でも上衣を取るほどの暖かさで、あるいは除

雪に、またはスキーに楽しい一日であった。しかし、その夕焼空は平常見馴れないどす赤さで、不審の眉をひそめた者も多かったが、思いがけない災いゆえは、こうした雪解けを待ちわびる楽しい夕餉の一瞬におそいかかったのである。

『峰山町役場日誌』（新治書記）

昭和二年三月七日 月曜日 晴。古川、中邑両書記午後賜暇。地震ノ為メ中邑書記圧死セラル。(外来者)新舞鶴分駐所勤務陸軍憲兵伍長近藤国治郎氏来場。(会合)午前十時ヨリ公会堂ニ於テ町村長会開催。(記事)本日午後六時二十八分大地震アリ。全町殆ド倒壊。続イテ各所ニ火災起リ、杉谷、吉原ノ一部ヲ除キ全焼シ、死者千百数十人。重軽傷者亦数百人ニ達シ、其ノ惨状筆紙ニ尽シ難シ。地震ト同時ニ役場モ傾キ、公会堂ハ倒壊セリ。小使岡本源造ハ火気ノ注意ヲ為シ、爐ハ水ニテ消シ、其後徐口ニ退場避難セリ。

三月八日 火曜日 曇 太田助役、谷部、田中書記震災救助米、杉谷デ交渉。太田助役終夜勤務セラル。

(注、第一回町議会は三月三十日で、道路計画、学校、公会堂建築の件が議題であった。)

また『峰山町大震災誌』から、震災の翌日三月八日の生々しい記録を抜き書きしよう。

三月八日、天明に及んで全町の火災は稍終熄せんとするも、濛々たる黒煙は町内一步も入るるに由なく、只、貌を膨らし右往左顧、密集に分け入りて避難者の点検に努むるも、哭泣の声各所に起り、且つ肌は顫ひ、食するに糧なく、午後四時頃には雨をも交へ、極度の疲労を感ずるに至りて、各所の森林中の集団は雪中に卒倒するもの多数を生ずるに至る。雨雪と闘ひ、妻子の白骨を前に一枚の莖もなし。郵便、電信、汽車、電灯、糧食、薪炭、塩、夜具を一時に断たれたる身は、一碗の白湯を需むるに由なく、近隣の村落皆倒潰又は全焼し、救助の人何れかより有るべき筈なく、衣食住を失ひたる罹災者は、恰も児を喪ひて狂える野生の動物と選ぶなく、雨雪を浴びて白骨の埋まる宅地を彷徨するのみなりき。……云々(田中信吉記)

雪の中を着のみ着のまま、森や広場に避難した家族を探してさまよい歩く空腹の人々の上に、無慈悲にも八日の午後四時頃から曇が降りそそ

いだ。この震の味は、本当に忘れられない。峰山市街で一家全滅は四十一戸に達していた。その中の一人、宮田澄助（子行）は『峯山町誌』を脱稿し原稿を松川先生に托して、三月八日東京の出版所へ送るその前日に罹災し、一家はもとより松川先生、町誌原稿および収集した資料一切が殉難焼滅した。峰山小学校で罹災した峯山藩文書、町家で焼けた町年寄記録、その他手控、覚書など、郷土にとってこの上もない不幸であった。

この災害の翌日、生き残った町長以下十一名の吏員は、自家の不幸をよそに消防の協力を得て、まず新山村から米三十八俵、杉谷から二十俵を徴発して応急救助にあたった。こうした涙ぐましい活躍の記録は、各町村、各公衙、学校、職場、その他、町村内の各所において限りなくあった。しかしまた「……天田郡上川口村消防隊四十五名は、魁として到着……」と同誌に記されているとおり、罹災地外からの救援はことに目覚ましく、この感謝は、奥丹後のつづくかぎり語り伝えられるであろう。

…

●京丹後市峰山 丹後震災記念館 地震







(碑文 原文)
震災記念塔

●与謝野町 板列（いたなみ）神社 地震





(碑文全文)

震災供養塔

昭和二年三月七日丹後有大震災死者数千人慘禍迄五十有八町村被害実一億金為由來我丹後誇和平無事郷無天變地妖臻如斯慘禍所振古來未曾有也此歲降殊多春將闋而積雪数尺寒威料峭此日朝來偶風温雪休戸々終業団欒就晚餐忽焉聽遠雷人々驚異語未畢大震疑是天地翻覆山崩石飛地裂水迂大小家屋一齊倒壞実不過一瞬也親不遑顧子々無由救親棟 擊架压者不知幾百人燈滅夜闇火災各所起喚親者索子者求救者号泣者断腸之声滿四辺噫何其慘采、我区死者実七十二人傷者無数家屋全壞百九十六全燒三十八而其余幾百家屋 無一全者損害無慮達百五十万金焉噫震禍之慘一何如斬也呼、抑家屋壞滅尚可忍矣得復 之也百五十万損害又可忍得償之也然而獨至死者則否痛恨何堪頃來存外岩滝人相謀為死 者建碑欲以修其冥福英魂亦長可以暝矣依記 昭和四年三月七日 小室利吉撰

●与謝野町 男山板列（いたなみ）八幡神社 地震



(碑文 原文)

昭和二年三月七日 震災記念

●京都市 西京区 大悲閣千光寺 大堰川開削工事での犠牲



(碑文 背景 大悲閣千光寺 HP から引用)

大悲閣千光寺は、京都の西、嵐山にかかる渡月橋から約 1km あまり上流へ行った所にあります。

千光寺は、江戸時代の豪商、角倉了以が、大堰川を開削する工事で亡くなった人々をとむらうために、嵯峨の中院にあった千光寺を、移転し建立させたもので、源信の作といわれる千手観音菩薩を本尊としています。

境内にある客殿「大悲閣」は、大堰川の切り立った岩肌に建つ観音堂で、嵐峡の絶景を眺める事ができます。

昭和 34 年（1959 年）の伊勢湾台風で、大悲閣、千光寺とも半ば倒壊し、長年の間、千光寺は仮本堂、傾いた大悲閣はワイヤーに支えられていました。2012 年より大悲閣の改修工事が始まり、現在ではその優美な姿が見られます。